昭和46年10月 3 日発行通巻30号(毎日曜日発行) 昭和46年 2 月 5 日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

10/3
220円
30

週刊 世界動物百科



イヌのすべてを5冊にまとめました30号⇨34号

イヌ・シリーズ

1. 人との交流 次号より ②狩猟犬 ③番 犬 ④愛玩犬 ⑤野生犬

朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第 30 号

カラーページ

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告

９月29日発売



世界動物百科
31号　10／10

カラーページ

食肉目 裂脚亜目 イヌ科 イヌ属
家犬（つづき）
狩猟犬
ウサギ猟犬 追跡犬 指示犬 テリア

かつて，人間がこん棒と石斧で山野に野獣を追っていた時代，鋭いきばと嗅覚，そしてスピードのあるイヌは，人間にとって力強い味方であった。今日，狩猟は生活のための意義が薄れ，スポーツとして隆盛している。別の名をスポーツ犬といわれる現代の狩猟犬に，人間とイヌとの変遷がうかがえよう。

私たちの仲間

紀州犬のおもしろさ　近藤啓太郎
見つめる黒い目　石井好子
イヌの東西交渉――アジアのイヌ――　カラーページ解説　内田　亨
夢の超特急　ヒグマと２人のイノシシ　29　畑　正憲
ダチョウと混同されたヒクイドリ　動物渡来記　4　上野益三
漢字のふるさと　24　藤堂明保
子どもとウマ　読者のアルバム　6

私たちの仲間
30号……10月3日

塩屋賢一

イヌと人との結びつき

——イヌの心理と能力——



盲導犬は，雑踏のなかをかきわけて盲人を巧みに導く（東京・浅草で）

頭がよく，とても利口だといわれているイヌが，仕事をさせるとあくびばかりして熱のはいらない態度で，のそのそとやっていることがある。人間のなかにもそんな人がいるので，「このイヌは，あの人に似ているな……」と思わず吹きだしたくなることがある。

イヌを擬人化して判断するのは，正しい判定とはいえないが，逆に，イヌの側から人を見てみると，たぶんなかなかおもしろいことが多いに違いない。イヌになって人間社会を観察したら，思わぬ収穫があるかもしれないと思うのは，わたしだけではないだろう。

外観ではわからない心理状態

ほんとうにイヌの気持になるのは困難だが，ここではまず，イヌの心理的な特質について述べてみることにする。

知　力　雌イヌのAは，とても物覚えの早いイヌだったが，ときどきのろまのイヌのような動作をすることがあった。「持ってこい！」という基礎的な服従訓練を，たびたび繰り返して命令されると，まるで訓練など受けたこともないというような態度で，指示された品物のほうへ走っていかないばかりか，そちらを見ようともしない。しかし，強く命令すると，「そんなことも習ったかなあ」というように，品物のところへいってくわえてくる。このイヌは，すぐれた知力がありすぎて，かえって穏やかな命令には従わないという，悪い癖を覚えてしまったのである。

教える場合には，非常にのみこみが早いのに，いざ仕事をさせてみるとさっぱりだめ，というのは，前の例のように，仕事を避けることまで覚えてしまったからで，訓練の失敗であり，なかなか矯正しにくいものである。

知力のすぐれたイヌは，命令にためらわずに服従する〝順応性〟についても優秀さを示すようだが，順応性の豊かなイヌは，その実力以上に知力がすぐれていると判断されがちである。指導者の命令に絶対服従するということだけで，知力がすぐれていると判定するのは早計のようである。

順応性　順応性とは，イヌが命令に応じて，要求された仕事を進んでやる心理的な動作をいうが，命令どおり正しく働かせるために，絶えずほめたり，しかったりしなければならないようなイヌは，順応性に欠けるイヌということができる。

順応性のあるイヌでも，ときによって，それを非常に発揮するときと，そうでないときがある。盲導犬を訓練している場合，はじめのうちはなかなか順応しないが，だんだんに順応していく場合があり，逆にはじめは進んで働いても，時間がたつにつれて，声を高くしたり，命令を繰り返さなければ，動作が鈍ってくることもある。

また，ある人には順応性を示さないが，他の人には自分から進んで仕事をするイヌがある。Bという雌イヌは，ある女性の盲人のもとでは，主人が盲目であることを知ってでもいるかのように，ときに命令を無視することがあった。ところが，主人が変わって男性の盲人になってからは驚くほどすぐれた順応性を発揮し，優秀な盲導犬として毎日主人の手びきをしている。

順応性にすぐれているということは，要するに，ほめられたり，しかられたりすることなしに，命令に応じて熱心に仕事を続けることだが，このように順応性というものを考えるとき，欠くことのできない要素として〝主人との結びつき〟というものがある。つまり，指導者によって同じイヌでも，すぐれた仕事をするイヌになったり，欠点の多いイヌになったりすることがあるわけだ。

作業欲　これは人間の働きかけによらず，イヌ自身に自然にあらわれるもの，いいかえれば，命令によって起こす動作ではなく，イヌの内面的な刺激，または，人間の力によって起こされたものでない外面的な刺激に応じて生じるものをいう。この作業欲は，イヌを働き手として人間に協力させようとする場合には，必要欠くべからざる要因である。

作業欲のおう盛なものは，知力もすぐれているようにみえがちであるが，この点の判定には，誤りのないよう注意しなければならない。作業欲の盛んなイヌは，犬舎や部屋に閉じこめられた生活をしいられると，ときには攻撃的になり，問題を起こすことがある。

実験的には，2日間短い鎖に縛りつけておくと，そのイヌの襲撃性が増大するといわれている。これは作業欲を抑圧されたために生ずることであって，この方法は襲撃性を欠いたイヌに，襲撃の訓練を行なうときに利用されることさえあるのである。



遮断機がおりてないときでも，踏切の手前にくると，盲導犬はスピードを落として盲人に注意をうながす



歩行中，盲人が「タバコ」というと，盲導犬は付近のタバコ屋へいく。盲導犬が盲人の「目」となるには，3～6か月の交流期間が必要である

襲撃性 襲撃性の過小なイヌには，襲撃性の訓練はできない。教えるのにもっとも容易なのは，過大な襲撃性をもったイヌであることは当然だが，パトロールに使われる警察犬や軍用犬などの特殊な目的をもつイヌをのぞいては，襲撃性の過大なものは，かえってふつごうな場合が少なくない。

家庭の番犬や盲導犬には，中庸程度の襲撃性をもつものがよい。これは襲撃を教えるためではないが，番犬として家庭の警戒に役だつには欠くべからざる性質だからである。また，盲導犬の場合も，襲撃性そのもののためではなく，歩道を歩いている人びとを押しわけても，盲目の主人を安全に誘導する気力が要求されるからである。

襲撃性は，イヌに対して重要な意義をもつものとは思われるが，現在一般に行なわれている襲撃訓練については多くの疑問がある。少なくとも現在のわが国の状況では，一般には襲撃訓練の必要はないのではなかろうか。

過敏性 ここでいう過敏性とは，刺激に対する反応をさすよりも，刺激に対する恐怖感をさすのである。過敏性の強いイヌというのは，ふつうのイヌならただちょっと顔を振りむけるくらいの刺激に対しても，とびあがって驚き，逃げだしたり，恐れおののくようなイヌをいう。

過敏性には，聴覚過敏性と触覚過敏性の2つがある。両者に直接的な関連性はないが，そのどちらであっても，仕事をさせるイヌ，人間に協力させるイヌとしては失格だといえる。家庭犬としても，次のような例があるので，過敏性のイヌは飼育をすすめられない。

ふだんはとてもおとなしく，家族の一員としてかわいがられているシェパード犬が，ひとたび夏の夜の花火の音や，雷のゴロゴロいう音を聞くと，突然気が狂ったようになり，主人でもだれでも見境なく，恐怖のあまりかみついてしまうのだ。このようなイヌは，日常どんなにやさしいイヌでも，飼育される資格があるとは思われない。

過敏性のイヌは，訓練による矯正が不可能だから，盲導犬にしようとするイヌには，すべて厳重にこの点に関するテストが行なわれる。訓練が進行して，もう一人まえの盲導犬として卒業しようとしている時期であっても，過敏性のきざしがあらわれた場合は，直ちにオミットされるのだ。なぜならそのイヌには，将来にわたって仕事中に失敗を起こさないという保障がないからである。

臭跡追求力 イヌであれば，すべて嗅覚（きゅうかく）が同じように鋭敏だとはいえないし，嗅覚の鋭敏性があらゆる作業に好つごうだとはいいきれない。警察犬や猟犬などは，嗅覚の鋭敏性が絶対に必要だが，それ以外の仕事に従事するイヌでは，嗅覚はあまり重要な意味をもっていない。盲導犬などは，嗅覚の鋭敏性はむしろマイナスといったほうがよい。なぜなら，鋭敏なイヌは臭気に出会うと，それに興味を示し，これまでの仕事を放棄してしまうことがあるからである。

また，嗅覚の鋭敏なイヌであれば，すべて臭跡追求能力にすぐれているわけではない。この追求能力は，他のいろいろな特質にも依存しているからである。優秀な臭跡追求犬というのは，指導者の示した臭跡を，どんな臭跡であっても追求しようと努力し，しかも，追求中はどんな他の臭気があっても，それにはわずかの興味も示さずに，ひたすら指示された臭気を追求するというイヌであって，これはほんとうに，選びぬかれた少数のイヌだけが可能なことなのである。

雄と雌の差異 雄イヌと雌イヌではどのような違いがあるかをみてみると，知力では平均して雌イヌのほうがすぐれているようだ。順応性も雌イヌのほうがよく，作業欲についても雌イヌのほうがわずかに高いようである。襲撃性については，これだけはやはり雄イヌに軍配が上がる。

こうしてみると，パトロールなどに使う警察犬や軍用犬をのぞいては，一般的には雌イヌのほうがよいようだ。とはいえ，雌の警察犬もあれば，雄の盲導犬もいるから，絶対にこうでなければならないというわけではない。

いままで述べてきたイヌの心理的な特質は，はたしてイヌの外観を見ただけで知ることができるだろうか。

目の色の暗色のものは，薄色のものより知力がすぐれているとか，胸量の大きさは大胆さを示す，かぎ状の尾のイヌは過敏性で，順応性がないとかいわれているが，これらは必ずしも，正確な事実ではないようである。イヌの心的な状態を知るためには，やはり直接実験を行ない，また訓練をしてみるのが第一で，これ以外に確実に知る方法はないだろう。

能力を引きだす心の結びつき

イヌの心理的な面から見た諸特性を述べてきたが，次には能力的な面からそれをみてみよう。

嗅　覚 哺乳（ほにゅう）類は一般に嗅覚が発達しているのだが，人類やサル類などは，その発達が非常におくれている。イヌはその感覚のなかで嗅覚がもっとも発達しており，イヌの生活は臭気によって左右されることが多いようである。隣室に好奇心を感じたとき，人やサルならば節穴に目をあてて隣室をのぞき見するだろうが，イヌは鼻をあてて臭気をかごうとする。

ナフタリン臭の強い晴れ着を着たときなどは，主人をまちがえてほえかかり，やがて着物の下の主人のにおいをかぎとって，あわててしっぽを振るというようなこともよくあることだ。視覚を使う人間は，顔や姿で他人を見分けているが，イヌはその人の体臭で見分けていることが，よくわかる例である。

このような嗅覚を利用して，イヌに安心を与えたり，不安を与えることができる。子イヌが，生まれた家から新しい飼育者のところへ1頭だけ移される場合，それまで母イヌや兄弟イヌとともに使っていた寝わらや，生家の主人の手袋などを子イヌといっしょにもっていき，新しい犬舎の中に入れてやると，不安な心理をある程度やわらげることができる。

夜泣きしていた子イヌが静かになったので，眠ったのかと思ってのぞいてみる

盲導犬の訓練

盲導犬の訓練期間は6か月。服従訓練，障害物の告知と回避，仕上げとテストの3段階に分けられている



白杖（はくじょう・盲人のつえ）を持ってこさせる服従訓練



自動車の回避訓練



人道から車道に降りる注意を教える

と，前の主人の手袋を喜んでもてあそんでいたりするものだ。これは，手袋にかぎなれた前の主人の体臭がついているので安心しているわけであって，このようなイヌの生活と臭気の関連を示す例は，多くをあげることができる。

それでは，イヌの嗅覚の強さはどのくらいなのだろうか。一説に，人間の数千倍ないし数万倍といわれているが，次のような実験からも，驚くばかりの能力をうかがい知ることができるだろう。

形のまったく同様な木片を用意して，それを前方に並べておく。それと同じ木片を，２秒間ほど手で握って人間のにおいをつけ，前に並べた木片のなかに混入する。わたしたち人間には，それがどの木片であったかわからなくなってしまうが，イヌは正確に選びだして拾いあげることができる。これは木片につけられたほんのわずかの手のにおいをかぎ分けて，目的物を捜しだしたことを示すものだ。なぜならば，次に木片には直接手を触れず，ピンセットなどでつまんで前と同じ実験をしてみると，イヌはどの木片も拾いあげないか，またはどの木片でも，手当たりしだいにくわえてみるのだから。

このようにすぐれた嗅覚のなかで，もっとも驚くことは〝個人臭を区別することができる〟ということである。わたしが子どものころ，弟が死んで４年も過ぎたある日，母がかれの着古した着物を整理していたところ，８歳になる家のイヌが，長い間会わなかった主人に会ったときのように喜んで尾を振り，とんでまわったことがあった。そのようすを見て，わたしは子ども心に涙の出るような思いをした。

視覚　イヌは嗅覚が発達しているので，視覚は劣っているようにいわれ，なかにはイヌは近視であるという人もいる。人間の視覚が，五感のなかでもっとも発達しているので，イヌと人間を比較すれば，もちろん人間のほうがはるかにすぐれていると思われるだろう。

しかし，視覚のなかで人間のほうがすぐれているとみられるのは，色覚と形覚だけであって，暗い場所における視覚はイヌのほうがすぐれているし，動くものに対しては，イヌは非常に敏感である。

視覚には，明暗覚・形覚・色覚などがある。実験によれば，明暗覚はイヌのほうが劣っているようだが，その差はごくわずからしい。形覚については，四角と円が区別できないという人もあり，また，四角・三角・円の区別ができるという人もあるが，いずれにしても，細かい輪郭は区別ができないようだ。

いちばん問題にされるのは色覚であって，ある学者グループは，イヌの色覚の存在をまったく否定しているけれども，わたしはある程度の色覚はあると思っている。もちろん人間から比較すればわずかなものではあるが，とにかく白色に対しては非常に敏感に反応する。

動くものに対する視覚がとくに鋭敏なことはイヌを飼っている人なら，だれでも感じることだろう。遠方を歩いている子ネコなどを，人間が気づかぬうちにすばやく発見し，首を高く上げ，注意力を集中して凝視するようなことは，日常よく経験するところである。

聴覚　イヌの聴覚は，人間にくらべて非常に鋭敏である。かれらは，わたしたちには聞きとれないような小さな音でも，いちはやくキャッチすることができるが，また，人間の可聴能力にくらべると，もっと高い周波数の音にも感じるようである。このごろは，人間の可聴限度の２万サイクルより，もっと高い周波数の笛ができて，遠くにいるイヌを呼びもどすことなどに使われるようになったが，イヌは，７万から10万サイクルでも聞こえるといわれている。

人間に仕えるイヌたち

人間の生活しているところならば，世界じゅうどこでもといってよいほどイヌも生活をともにしている。これはイヌには，どんな環境にも容易に慣れるという習性があるからであって，他の動物では，なかなかそうはいかないものだ。熱帯の動物を寒冷地に連れてきて，そのまますぐ飼育するということはむずかしく，長い時間をかけてしだいに順化させることが必要である。それでもなお気温にはじゅうぶん注意して，ときには暖房などの措置を講じたり，飼料も特別のものを用意することが必要であったりする。

それにくらべてイヌ族は，メキシコ原産のイヌを日本に連れてきても，はじめのころにちょっとした注意を怠らなければ，飼料など特別な配慮を加えなくても飼うことができる。

このような環境順応性に加えて，さらにイヌが飼い主に忠実であり，与えられた仕事をやりとげるという特質をもっていたことが，人間社会にとけこむようになった大きな原因であって，人間はこのイヌの能力を生かして，いろいろな方面に役だててきた。

イヌと人間のつきあいは，人間の生活が始まるとまもなく開始されたと思われるが，おそらくかれらは人間とともに，獲物を狩って生活してきたことだろう。またある時代には，主人を守ろうとする本能と襲撃性を生かして，敵陣へいっしょに突入したという多くの実例もあった。

家庭犬　今日では，飼われているイヌの大多数は家庭犬であると思われる。家庭犬は大別して，愛玩（あいがん）犬か，番犬か，この両者を兼ねたものか，の３種に分けられる。

愛玩犬は，見かけのうえでは幸福のようだが，１日じゅう主人の気をうかがいながら生活しているわけであって，イヌの立場としては，なかなかたいへんに違いない。

番犬は，警戒性を基礎にして，すぐれた嗅覚，聴覚を働かせ，外敵の接近や侵入をいちはやく主人に警告するので，主人の一家は安心して寝ていられるわけである。

この場合，イヌが警戒の声を出したとき，主人もそれにこたえて，窓から顔を出してようすをうかがうとか，あるいはイヌをなだめて，いつまでもむだにほえるのをやめさせるなどして，イヌとともに自分の家を守るという心がけが必要である。せっかくイヌがほえているのに，まったく無関心で，いつまでもなかせて









イヌには障害にならないが，人には障害になるものの回避（上）

障害物の間を通りぬける訓練（中）

教官が目隠しをしてテストを行なう。横断歩道と四つ角での歩行（右上・右下）

いる飼い主が少なくないが，近隣の家に迷惑であるばかりでなく，これは番犬としての働きも，まったく意味の少ないものになってしまうだろう。

以上のような家庭犬は，ことさらにすぐれた能力を必要としていない。むしろ性格の円満ですなおなことがたいせつである。家庭犬は人間社会のなかにすむのだから，〝社会人〟としてのしつけと訓練がどうしても必要なことなのだ。

飼い主は朝晩の食事を与えるのと同じように，義務としてしつけを教えこまなければならない。〝犬害〟などといって社会問題になるようなことは，飼い主がしつけを怠ったイヌが起こすのであって，厳格にしつけられたイヌであれば，問題を起こすようなことは絶対にないはずである。

飼い主は，自分の子どもをしつけるように，自分の手でイヌをしつけるべきであって，これが自分のイヌをすぐれたイヌにする最善の方法であり，同時にイヌにとっても，いちばんしあわせなことであるということができる。

犯人の追及に活躍する大胆なイヌ

警察犬 警察犬には，嗅覚を利用して捜査に使用される刑事警察犬と，警戒性・襲撃性を活用した警ら警察犬とがある。

警ら警察犬は訓練も容易であり，その効果も確実なので大いに利用されるべきだと思うが，わが国ではまったく使用されていない。この種の警察犬が果敢な襲撃性をもっていると聞かされると，一般には恐ろしい猛獣と同じように考えて，わけもなく攻撃してくると思いがちであるが，これは大きな誤解であって，正しく訓練された警察犬は，ふだんはまったくおとなしい安全なイヌである。なぜなら，警察犬は絶対服従ということを，からだに刻みこむように教えられており，どんなに興奮したときでも，主人の命令がなければ攻撃することはないからである。

刑事警察犬はわが国でも使用され，犯罪捜査に相当の成果をあげている。イヌは犯人の足跡からその固有臭をかぎだし，それによって犯人を追及するのである。足跡には，その土地の臭気，草のにおい，靴の皮や靴クリームの臭気などが入り混じっており，これらに惑わされずに，犯人の固有臭を追求するということは，きわめて困難な作業である。さらに，風の有無，湿気の増減による変化を考えればその困難性は多大なものになるだろう。

これらの困難を乗り越えて，あくまで固有臭を追求しつづけるのは，やはりすぐれた能力をもち，きびしい訓練にも耐えて，人犬一体となって働くことのできる，順応性に富んだ大胆なイヌでなければならない。

嗅覚を使った警察犬の仕事には，もうひとつ物品の臭気判定ということがある。まず現場にあった犯人のものと思われる物品を，臭気を保つためにガラス瓶などへ保管しておく。次に犯人の体臭をイヌにかがせる。そこで，先に保管しておいた物品と，犯人に関係のない他の同じような物品とを混ぜておき，イヌに持参を命令する。もし，犯人の体臭と物品の臭気とが一致すれば，イヌはその物品を持ってくる。こうして犯人を確定する一助にすることができるし，またこれを見て，容疑者が自白することも少なくない。

盲導犬 これは第1次大戦後，ドイツで急速に発達したもので，シェパード犬がおもに使われていたが，最近では猟犬の一種であるラブラドールも加わるようになった。

盲人は，盲導犬の誘導によって，だれの手を借りることもなく，自分のペースで歩行できるので，実質的な生活面ばかりでなく，精神的にも大きなプラスとなり，晴眼者に伍して社会生活ができるようになる。

ある盲人は，盲導犬の力をたたえてこういっている。「杖一本をたよりに歩行していたときには，神経をすり減らし，危険にさらされながらとぼとぼと歩いていたのだが，盲導犬がきてからは，人並みの速さで，しかも危険を感ずることもなく歩けるので，歩くことが苦痛にならなくなった。もっとも楽しいのは，ときに晴眼者を追い越すことができることだ。人を追い越したときは，ほんとうに優越感を味わうことができる」。これは，いつも他人のあとからばかり歩いていたコンプレックスからの，解放の喜びをいうのだろう。

また，盲導犬を手にした女性は，男性とは違った喜びを感じることもあるようだ。盲目の若い母親は，これまで買物にいくにも，おばあさんに子どもを背負ってもらい，手を引かれて歩いていた。しかし盲導犬がきてからは，自分で子どもを背負い，イヌといっしょに外へ出られるようになったのだ。「買物にいくというと，背負いひもをもって，おばあちゃんのところへいった子どもが，わたしのところへ走ってくるようになりました。わたしもふつうの母親に，やっと一歩近づくことができたのです」と，その母親は涙ぐんでいた。

× × ×

ここにとりあげてきた「家庭犬」「警察犬」「盲導犬」のほかにも，「軍用犬」「猟犬」「牧羊犬」「そり引き犬」など人間とともに生活し，人間社会に役だっているイヌは多い。

イヌと心の交流を

かれらはつねに，人間と一体になって仕事をしているのであって，そのためには人間とイヌとの心の結びつきが，何にもましてたいせつである。どんなに優秀なイヌであっても，飼い主とのあいだの心の連帯がないならば，役だつイヌになることはありえないといえるだろう。

現在盛んにいわれている〝動物愛護〟ということは，たんに人間の自分かってな愛玩心をいうのではなく，ほんとうに動物の心を理解し，心の交流を求めることをさすのであろうが，イヌを理解し，イヌを愛し，働きを通じて生みだされる心の結びつきが，さらに拡大して人と人との心の交流にまで発展するならば，人とイヌとの共同生活の歴史も，より深い意義をもつことができるのではなかろうか。■

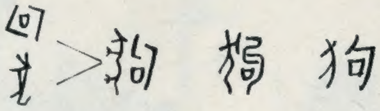
（東京盲導犬協会理事長）



ものを持ってこさせるのは服従訓練のひとつ。それを応用して，ちり取りや新聞など，特定の物品を持ってくるようにしつける

漢字のふるさと 23

藤堂明保



犬・狗（いぬ）　むかしは「犬」といったが，今の北京語では「狗」といいgouと発音する。

「犬」という字は，前にも述べたことがあるが，すばしっこいイヌが走っている姿を，縦に描いた象形文字である。また，ケンということばは，その「ケンケン」という鳴き声になぞらえた擬声語である。

ところが飼い犬の方は，古くから「狗」と呼ばれていた。たとえば，漢の高祖を助けた名将の韓信は，天下を平定すると，高祖にけむたがられた。そして，謀反のきざしあり，という口実で都へ呼び出された。韓信は「今はこれまで」と悟って，「狡兎（すばしこいウサギ）死すれば，走狗（足の早い猟犬）は烹らる」とつぶやいて，毒をあおって自殺した。また，昔からコソ泥のことを「狗盗」という。どうも，イヌはあまりよいたとえには使われない。今日でも「美帝（アメリカ帝国主義のこと）とその走狗を打倒せよ」という標語が，中国のいたる所に太ぶとと書かれている。

「句」という字は，「口」＋「勹」からなっている。口で述べた長い文章を，かっこで小さくくぎることを表わした字で，区画の「区」と同系のことばである。だから「狗」とは「犬」＋「句」で，小さくくぎられた犬，つまり，小さな枠内におさまった小柄なイヌを表わしている。使いやすい飼い犬という意味から，やがて「走狗」という意味となったわけだ。逆にいうと，イヌがいかに飼い主に従順な動物であるかを表わしているのである。■



イヌ科　*Canidae*

イヌ科の動物は，食肉目裂脚(れっきゃく)亜目に属している食肉類である。この科の動物のからだの大きさは，いちばん大きな種類でも，トラなどのようなネコ科のなかの大きなものには及ばない。また，力の強さも，身軽さもネコ科の動物には一歩をゆずっている。しかし，肉体的にも，感覚的にも，すばらしい力をそなえた動物である。

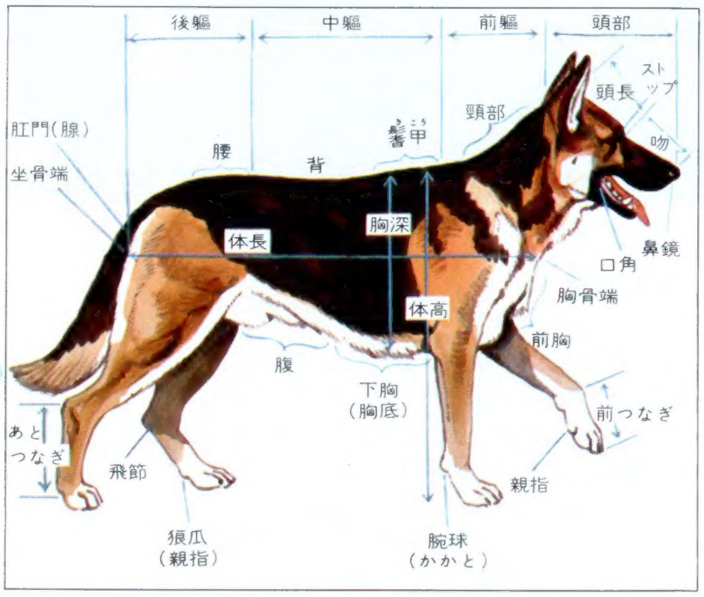
からだつきは一般にすらりとしていて，頭部は小さく，吻（ふん）はとがっている。足はかかとを地面につけないで，指だけで歩く指行（しこう）性である。前肢（ぜんし）の指は５本あるが，親指は非常に退化しているために，他の指より少し上のほうについていて，地面には触れていない。後肢（こうし）も，多くの場合，親指が退化しており，指は４本しかない〔注１〕。つめは強いけれども，ネコのように引っこめられないから，歩くとき地面に触れ，すり減ってしまっている。尾の毛は，ふさふさしているものが多い。

歯は，最高42本と哺乳（ほにゅう）類のなかでも比較的多く，典型的な歯式は，あごの片側でみると，門歯３／３，犬歯１／１，前臼歯（きゅうし）４／４，臼歯２／３となる〔注２〕。犬歯はよく発達し，臼歯の表面は独特な形をしていて〔注３〕，雑食性であることをよく示している。乳歯の歯式は，門歯３／３，

ローデシアンリッジバック（Rhodesian ridgeback）。
別にこのイヌが，木登りがうまいわけではない。
たまたま，気まぐれに登ったまでであろう。
南アフリカのローデシアにすむイヌで
ライオン狩りなどに使われる。

PH. MAC





イヌのからだの名称図。
家犬の場合，体高，体長のはかり方が
他の動物と違うことにご注意願いたい。
本文にでてくる体高，体長は，この図のとおり。
図例はシェパードである。
イラスト　木村しゅうじ

犬歯１／１，前臼歯３／３である。

イヌ科の大きな特徴として，汗をかかないということがある。多くの哺乳(ほにゅう)類は，気温が高くなったり，運動したりすると汗をかき，水分が蒸発するときに熱を奪うことで，体温を一定に保っているが，イヌ科の動物は，指の間と足のうらに，わずかの汗腺(かんせん)機能をもつだけで他の部分の汗腺は実際には機能がなく，ほとんど汗をかかない。そのかわりイヌは，口をあけて舌を出し，早い呼吸をして体温の調節をする。この動作をパンチングといっている。

汗腺は少ないけれども，皮脂腺(ひしせん)〔注４〕はたくさんある。とくに肛門(こうもん)のまわりにある皮脂腺は，肛門腺〔注５〕といって，よく発達しており，猛烈な臭気をもつ物質を分泌(ぶんぴ)する。イヌどうしおたがいにこのにおいをかいで，相手の性や個体を区別している。

半夜行性の集団

イヌ科の動物は，きわめて早い時期に地上に現われ，遠いむかしから広く分布していたことは疑う余地がない。

現在では，太平洋と大西洋のいくつかの島をのぞいて，どの大陸にも，人間のいるところならどこにでもいる。動物層の異なるオーストラリアにも，ディンゴという野生のイヌ類がいる。

イヌ科の動物は，あらゆる気候，あらゆる環境のなかで生きている。都会のなかでも，平野でも，山のなか，密林，草原，砂漠にまでもいる。あるものは放浪生活〔注６〕をし，子どもを生んで育てる間だけ，一定の場所で

コヨテ。イヌ科イヌ属。
夜行性で北アメリカの草原地帯にすみ
《草原のオオカミ》と呼ばれている（上左）
オオカミ。イヌ科イヌ属。北方地域で恐れられ
ネコ科に負けない敏捷さをもっている（上右）
PH. J. SIMON–PHOTO RESEARCHERS（上左）　*PH. OKAPIA*（上右）

リカオン。イヌ科リカオン属。
アフリカヤケンともハイエナドッグともいわれ
アフリカ大陸に広く分布している。
耳や顔つきなどはハイエナによく似ている。
嗅覚が鋭く，獲物に対して実に凶暴だ。（右下）
PH. P. VASSELET–ATLAS PHOTO







家族的な生活をするもの，また，地面に穴を掘ってすんでいたり，他の動物が捨てていった巣穴にもぐりこんでいるといった種類もある。〔注７〕

人間のまわりにいるイヌは昼行性だが，これは飼い主の生活に順応したもので，野生のものはふつう半夜行性であり，完全な夜行性のものもいる。昼間はほとんど茂みやジャングル，廃墟などの隠れ家にひそみ，夜になるとさまよいでてくる。村や町にまでくるのもあり，朝の光がさすころには隠れ家へと帰る。

１匹だけでいる，いわゆる《一匹狼》や，つがいだけで生活しているのもあるが，ふつう繁殖期をのぞいては，群れをなして生活している。また，雄と雌とがしばらくの間だけつがいでいるような種類の場合でも，そのつがいが集まって大きな群れをつくる。そして，その群れのなかには階級ができる。〔注８〕

利口さゆえ主人もち

すばしっこさという点からみると，イヌ科の動物はネコ科の動物に，ちょっとかなわない。たとえば，平衡感覚があまり発達していないことや，つめがすり減っているので木には登れないし，ネコ科の動物ほど跳躍力もないといったところである。けれども，その他の点，長い距離を走るといったことについては，ネコ科の動物にまさっている。

イヌ科の動物は，すべてがよく走り，また疲れを知らずに歩きまわり，泳ぎもできる。なかには泳ぎの非常にうまいのもある。ネコ科と同様に指行性だが，奇妙なことに前進するとき，進行方向に向かって肢（あし）の運びがまっすぐでなく，やや内側に斜めにして歩いていく。すなわち，内股のようになり，そのうえ，からだをやや斜めに倒しており，足跡でみても一直線上に並んでいない。

感覚は，全般にわたって非常によく発達していて，聴覚はネコ科にくらべて劣っているが，嗅覚（きゅうかく）は並みはずれて鋭い。視覚は夜行性のもの，昼行性のもの，ともに発達しているが，暗いところでものを判別する明暗視は，ネコ科には及ばない。

イヌ科の動物は，いったいに利口である。その利口さが，人間とイヌとを結びつけたといってもよいだろう。この利口さが，あらゆる家畜のなかで，イヌの地位を特別なものにしている。この利口さは，野生状態でいるときにも発揮されており，日常の用心深い１つ１つの行動にそれを見ることができる。

食べ物は，主として肉である。肉なら，新鮮であろうと，腐りかけていようとかまわず食べる。また，好んで屍肉を食べるものもい



セグロジャッカル。イヌ科イヌ属。
オオカミにくらべると，かなり小さいが
ハゲワシと争ってまでも，たじろがずに
獲物をわが物にしようとするすごさがある。
北はコーカサスから，南はビルマ，タイまで分布。
PH. A. PICOU–FOTOGRAM



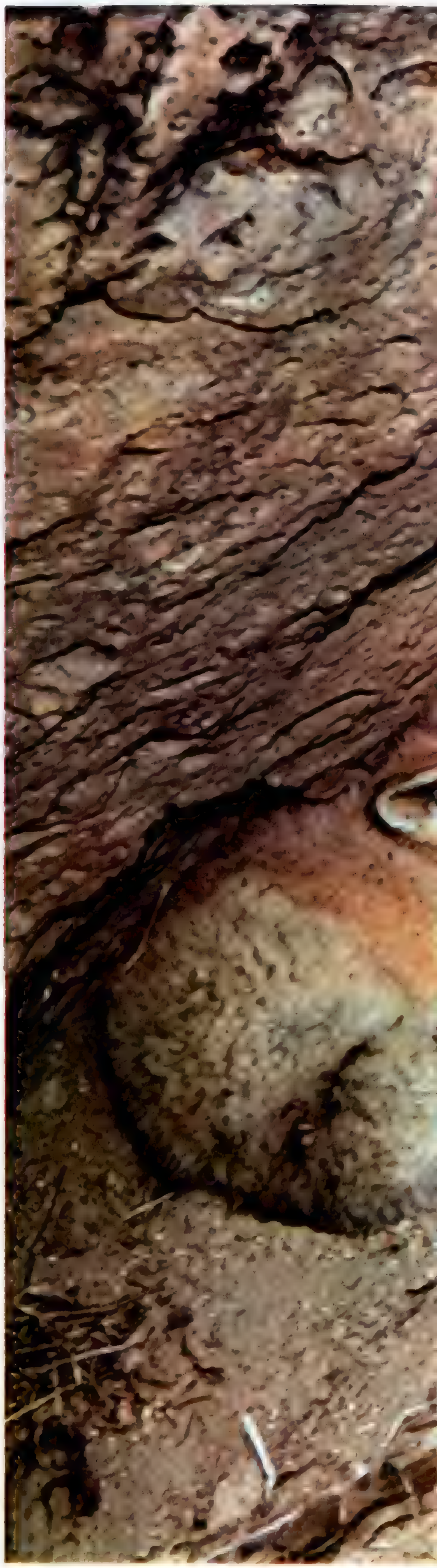
る。哺乳（ほにゅう）類や鳥類の肉などのほかに、甲殻（こうかく）類や昆虫（こんちゅう）類も食べる。また、蜂蜜（はちみつ）、果実のような甘いものとか、ビタミンCの補給に草木の根や葉を食べる。これらから、イヌ科の動物は、食肉類では雑食性が強いといえる。たいてい、食欲は猛烈で、一度にたくさん食べるが、逆に1週間食べなくてもいられる。いっぺんに食べきれないほどの獲物（えもの）を殺すことがあるが、それは狩猟（しゅりょう）本能〔注9〕によるものである。しかし、イタチ科やネコ科にくらべれば、それほど狩猟本能が発達しているとはいえない。

出産は、イヌ科のなかでも種類によっていろいろと違っているが、1回にだいたい1～12匹で、生後7か月くらいから年1、2回の発情期を迎え、飼われているイヌのほうが発情期の回数が多い。

イヌ科は12属あるいは、コミミイヌとカニクイイヌを別属とした14属からなり、さらに約30種に分けられる。次に、家犬、野生犬〔注10〕、キツネ、オオカミ、ジャッカルなどについて、この順序で述べていこう。



オトキヨン。イヌ科オオミミキツネ属。
オオミミギツネともいわれるが
それは鳥の羽根のような大きな耳からきている。
アフリカ東部から南部の平地にすみ
よく発達した耳で敵と獲物の動向をうかがう。
PH. ZUBER RAPHO





コヨテの子どもたち。
子どもながら，野生犬のたくましさと
凶暴さを早くもみせている。
野生犬は，家犬よりも産子数が少なく
１産４～６匹ぐらいだ。

PH HOLMES LEBEL



家犬の用途別分類表

- 左はしのそれぞれのイヌの型から，イヌの用途が分化したことを示している。
- ここに掲げた犬種は，多くの犬種のなかの一部である
- ここに分類したイヌが，その用途だけに役だつということではない。いくつもの用途に適した特徴をかねそなえている場合が多いのだが，ここでは，各用途の代表的な犬種，特徴的な犬種ということにして掲げた。
- イヌの用途内容も，ここに掲げた項目がすべてではなく，やはり特徴的なもの，代表的なものを出している

①軍用犬　マスティフ型……アッシリア，マケドニア時代に，戦争のとき人間を攻撃させた古代軍用犬

②食用犬　チャウチャウ……現在ではほとんどが，愛玩犬や番犬として飼われている

イラスト　木村しゅうじ

イヌ属　*Canis*

イヌ属には家犬〔イヌ〕，オオカミ，ジャッカルなどが属する。家犬のうち，野生生活をするディンゴ，パリア犬は野生犬として述べる。

家　犬　*Canis familiaris*

家犬は，イヌ科のうちでももっとも人間に身近な動物たちで，家で飼われているイヌ，のらイヌのほかに，野生犬のパリア犬とディンゴもはいっている。家犬は，イヌ科イヌ属のなかで１つの種となっている。しかし，１つの種であるにもかかわらず形態的には，あらゆる動物のなかでいちばん多様化した品種の集まりだといえよう。

実際，あの大きなセントバーナードと，小さなチワワ，脚（あし）の短いダックスフントとが同じ種だとは，とうてい思えない。しかし，このことは形態学的な特徴――骨格，頭骨の形態，歯式など――が一致していること，また，たがいに受胎できる〔注11〕ことをあげて同種であると証明するまでもなく，イヌたちにはとっくにわかっていることなのである。からだの形や大きさ，毛の色がどうあろうとも，同じ仲間であることを，世界じゅうどこにでもいる無数の雑種犬が示している。

祖先はオオカミか

家犬の起源について，はっきりした説はない。いずれにせよ，同じ家畜であるヒツジやヤギなどにくらべて，いちばん早く人間に飼われた動物であることはまちがいない。新石器時代にはすでに飼われていたことが，骨の発掘によってわかっている。さらに，骨にいろいろな形があることから，そのころからイヌの形は多様だったと考えられる。〔注12〕

イヌの祖先について，ある動物学者は，チベットにはじめて現われ，そこからほかの大陸に移動していったといい，ほかの学者は，何種類かの系統の家犬が同時にいろいろな地方で生まれたと考えている。しかし現在，イヌに近縁な動物にオオカミ，コヨテ，ジャッカルなどがあり，そのうち一般に，いちばんの祖先と思われているのはオオカミである。オオカミはイヌと同じように群れをつくって狩りをし，歯の形は違うが同じような歯式をもっている。オオカミは遠ぼえはするが，イヌのようにほえたてることはない。しかし，イヌとオオカミとのあいだに，子どもが生まれた例はたくさんあるから，祖先であるといえないにしても，系統的にごく近い種である

フォックスハウンドの群れ。
ポインターやセッターと並んで
狩猟犬の代表である
数十頭が，ウマにまたがったハンターに率いられ
キツネを狩りだす壮大な狩猟が展開される。 右
PH. RIZZINI









草を求めてヒツジを追っていく光景は
牧歌的ということばそのままだろう。
何百頭ものヒツジを牧舎から出し入れする作業は
群れのまわりを回ってヒツジを散らさない
牧羊犬の力なしにはできないことだ。(30—10,11)
PH. LAUROS

カナダのそり引きイヌ。エスキモー犬と思われる。
スコットやアムンゼンが極地探検をした時代には
イヌぞりが唯一の運輸機関だったが
機械化された現代でも，まだまだイヌぞりは
重要な役割を果たしている。
撮影　藤木高嶺

と考えてよいだろう。オオカミは旧大陸の北方の家犬の祖先であり，ジャッカルが南方の家犬の祖先という説もある。この問題については，はっきりした結論は出ていない。

人間は，イヌをうまく家畜にしてから，原産地の違うイヌとイヌとを交配して，たくさんの品種をつくりだすことができたが，それは自然条件ともからみあっていた。つまり，新しい気候条件や生活環境に適応した，それぞれの形態や能力をもつ犬種に，分かれるようになったものと思われる。

また，イヌが家々で飼われるようになったことは，１匹１匹のイヌを引き離し，その交配を人工的に調節することにもなったので，このことも品種の分化にとって大きな役割を果たした。野生の状態のままであったならば，弱い品種は自然淘汰によって，たちまちふるい落とされたに違いないが，これも家畜となったおかげで生き残れたのだともいえる。

人間は，狩猟とか番犬とか実際に役だつ品種，観賞用の美しい品種をつくりだそうとして，イヌを特定の形に固定するのに努めてきた。しかし，これは生物学的にみれば，むしろ自然なイヌの姿をこわすことになっている。

飼われるきっかけ

ある動物で，１つの種でありながらさまざまな違った形態があるのを，多形現象というが，そのことと，他の動物にくらべて人に飼われやすい性質とのあいだには，関係がある







人間に飼いならされてしまったイヌにとって垣の外は，あらゆる魅力を秘めた世界である。好奇心をくすぐる外界を前に，あこがれ，警戒しふてくされる表情は，いかにも人間くさい。
(上ボクサー，下左マスティフ，下右スカイテリア)
PIESCHEVALLIER–ATLAS PHOTO　AARONS　BUZZINI



といわれている。イヌの場合も，原始時代に人間といっしょに生活するようになって以来，その形態もいろいろに変化してきたのである。イヌの発展の歴史をみるうえで，"飼われている"ということを無視しては語れない。もし，飼われないで野生のままにいたとしたら，現在のようなさまざまな形態にならずに，オオカミのような姿で荒野をさまよっていたろう。

イヌと人類とを結びつけたのは，おそらく食べ物の残りだったと考えられる。飢えたイヌの群れが，人間部落の食べ残しを毎日のようにあさったのだろう。部落の周囲にイヌがいると，イヌよりも危険な肉食獣がやってきたことをほえて知らせるので，イヌはさしずめ警報装置の役割を果たしたはずである。

第２の段階として，イヌと人間とでいっしょに狩りにいき，そこでおたがいに利用価値を見つけたといえる。最後の段階は，人間がイヌにヒツジの群れの番をさせた。つまり，オオカミの獲物となる動物は，オオカミの姿に気づくと，かたまり，集まって身を守ろうとする。そのとき足のおそい集まり遅れたものが，群れから引き離されてオオカミに襲われることになる。イヌがヒツジをうまく集めるのも，ヒツジのこの本能を利用している。

イヌはふつう，群れをつくって生活しているため，群生している動物がみなそうであるように，グループのなかでの階級意識は非常に強い。そのため，捕えられ，飼われたイヌは，飼い主を群れの長としてごく自然に受け入れ，馴化されやすかった。

イヌの性行動も，馴化に際して重要な意味がある。それは子を生むのが簡単だということで，他の多くの動物のように，相手を選ぶとき儀式めいたことをしたり，つがいで群れを離れて暮らすといった，複雑な習性をもっていたなら，人類の意思に従って繁殖されることはなかったろう。

このようにして人類は，住居の近くに生息していたイヌ類の１種を馴化して，いっしょに生活するようになった，と考えてよいだろう。その種は今日，東洋でみられるパリア犬のようなものだったろう。

出産から成長へ

家犬の場合，姿かたちは千差万別だが，どのイヌも共通した性質をもっている。

出産についてみれば，雌イヌには春，秋の年２回の発情期があり，なかには年４回のときもあって野生犬の年１回よりも多い。交尾時間はかなり長く，30分以上にも及ぶことがある。妊娠（にんしん）期間は品種によって多少の差はあるが，ほとんど９週間である。

グレーハウンドの母と子。
生まれたばかりでは目が見えないが
10日ほどすると目があき，歩けるようになる。
母親の愛護が，まだまだ必要な時代である。
PIC. BUZZINI





分娩（ぶんべん）は，長いのになると2日も3日もかかるのもあるが，だいたい胎動を起こしてから5分から1時間で生まれる。子イヌは膜に包まれたまま生まれてくるので，母イヌは，その膜をすぐに引き裂いて，呼吸ができるようにしてやらなければならない。母イヌがおぼつかないときは，もちろん飼い主の手で裂くのを手伝ってやらないと，子イヌは死んでしまう。

母イヌは，へその緒を歯でかみ切ってから，多くの哺乳（ほにゅう）動物がするように胎盤（たいばん）を食べてしまう。この胎盤にはホルモンがたくさんふくまれているから，これを食べると乳の出がよくなるのである。

1回に生まれてくる子の数は，ふつう1～12匹だが，23匹という記録もある。あまり多く生まれると子イヌの死ぬ率が高くなる。生まれたての子イヌは，目も見えず，ひたすら嗅覚（きゅうかく）で母イヌの乳首を捜すばかりだから，母親のからだのあたたかさと，じゅうぶんな注意がなければ生きられない。

母イヌはたくさんの乳を出し，数日間とい

アイリッシュセッターの子。
子イヌは，生まれるとすぐ母親の乳ぶさに吸いつく。
そして，3週間はほとんど母乳だけで過ごす。
母親は，自分の子どもに対してきびしく
乳を捜しあぐねていても手をかさない。（上）
PH. E. P. S

コリーの親子。子イヌは生後ほぼ4週間めから
飼い主が与える離乳食を食べ始め
約6週間後には離乳する。
2か月めごろから母親の乳ぶさを忘れるから
子イヌをもらうのは，この時期からがよい。（下）
PH. HOLMES LEBEL

うもの，子イヌのそばをほとんど離れずに注意深くめんどうをみる。10日くらいで目が見え始め，3週間めの終わりころになると，子イヌたちどうしで戯れるようになる。

子イヌどうしの戯れに，母イヌが加わることもある。しかし，これはたんなる遊びではなく，あごの力を強めるためであり，またかまれたときの苦しさを知ったり，挑戦するときのうなり声をあげたりといった，これから先，ひとりで生きぬくための修行なのである。

4週間めになると，子イヌは，他のイヌに負けたとき，服従の姿勢をするようになる。つまり，あおむけになって腹を出し，尿をもらしたりする。これはイヌどうしのあいだで，この動作が何を意味するかを知ったことを示している。いろいろなものをくわえてくることを覚えるのも4，5週間したころである。そして，6週間もすると，イヌとしての行動はことごとく身につけてしまう。

生まれてから，はじめの6週間に人間との接触がまったくなかったイヌは，なかなか飼いならせない。飼われるということをまったく知らないで大きくなったイヌは，環境に順応しにくいから，人間にとって，たちの悪いのらイヌとして生きることになる。

鋭い感覚

イヌは，鼻がきくことの代名詞にも使われるが，嗅覚（きゅうかく）〔注13〕の鋭さは，品種によって大きな差がある。しかし，イヌの感覚のうちで，嗅覚がいちばんよく発達していることはいうまでもない。

イヌの嗅覚が，たんに鋭いだけでなく，イヌ自身の生活にとっても，いかに重要なものであるかを調べた実験がある。

子イヌの嗅覚を働かなくしてしまったら，母イヌの乳ぶさを見つけることができなかった。生まれたときは目も見えないし，耳も聞こえないから，働いている嗅覚で母イヌの乳ぶさを捜し当てるわけである。嗅覚の働かないイヌは，大きくなって走れるようになっても，道には迷うし，自分の寝床への道もわからなかったという。また，食べ物も視覚にたよるだけだから，パンと肉を並べておいても，肉にとびつくということもなかった。そのうえ，まったく人になつかなかったという。

嗅覚のないイヌはそのようにだらしないわけだが，一方，鋭いのになると，持ち主がほんの2，3秒手にもっていた1枚の紙幣でも，厚い札束のなかからかぎ分けられる。

イヌの嗅覚をもっともよく利用したものに狩猟犬や警察犬がある。イヌが獲物のあとをつけるとき，たとえ獲物の足跡にほかの足跡が混じっていても，最初の獲物のにおいを見失うことはない。

イヌが追いかけるにおいの目じるしを臭跡というが，これは，ある人間，ある動物が地面を踏んだり，草や木に触れたりして残していく，においの跡である。臭跡は，揮発性の微粒子が草や木などに付着した状態であるから，風や雨，熱でもって薄まってしまう。

イヌにとってつごうのよい状態は，地面が多少湿っていて，天気も穏やかで，しかもあまり暑くないといったときである。これだと，臭跡は24時間も残っている。湿った草原や，下草の茂る森などで，天気が穏やかなら，よく訓練されたイヌは48時間，あるいはそれ以前につけられた臭跡でも発見できる。

一方，舗装道路や地面がなめらかで，植物もないようなところ，草や木のあるところでも，雨で洗い流されたあとなどは臭跡が残りにくい。乾燥した土地で，風の強いときや，雨の日などは，数分で消えてしまう。

跡を追いかけるのは，総合的にみて雄がすぐれている。とくに雌は，発情期などのときには感覚が鈍るので，警察犬などには雄を多く使っている。雄にせよ雌にせよ，イヌは飼い主といっしょのときだけ，飼い主の命令したにおいの跡をうまく追う。もっとも，イヌが自分で好きなにおいを追うときは，例外である。

イヌはまた，嗅覚だけでなく聴覚も鋭敏である。人間の耳は1秒間に1万5000サイクルくらい，せいぜい2万サイクルまでの音しか聞きとれぬが，イヌは1万から，10万サイクルの超音波まで感じとることができる。しかし，ネコなどにくらべると劣っているようである。

耳に，立耳とたれたものとがあるが，聴覚の鋭さという点からは差はない。耳介は，音のくる方向を知るのにより役だつだけである。

視覚は一見したところ鋭そうだが，人間よりも悪いようである。近視の傾向があって，100メートル離れたところにいる飼い主と他人とを判別できない。また遠くにあるものでは，止まっているものは見えなくても，動いているものだとかなり識別できる。狩猟的本能から動くものに鋭く感じるのだろう。

信号を見て交差点を渡るイヌがいるが，実



フォックスハウンドの子。
イヌは元来，肉食性の動物だが
人間に食べ物をもらうようになってから
雑食性の色合いを濃くしてきた。
しかし主食は，やはり肉類が好ましい。
PH BUZZINI



際にはイヌはほとんど色盲である。だから，あれは人の流れを見ながら信号待ちしている姿である。イヌにとって，この世はまさに白黒の世界だといってよい。これも，元来イヌは半夜行性で，やみのなかでは色を見分ける必要がなかったからと思われる。そのかわり，暗やみでものを見る明暗視はすぐれている。

肉7野菜3の食べ物

家犬といえども，食肉目に属しているわけで，食べ物はやはり肉が主となる。しかし，野生の肉食動物が草食動物を殺すと，まず獲物の内臓から食べ始めて，そのなかにある消化されかけた植物から，肉食では得られない必要なビタミン類をとっていることをみても，飼いイヌの場合にも，3分の1くらいは植物性のものを食べさせなくてはならない。このため，家犬は雑食ということになる。

食べ物は，太ったほうがよいもの，精悍な姿がよいもの，日本犬のように比較的肉を食べてこなかったもの，長い毛を保たねばならないものなど，それぞれの特性があるはずで，一概にはいえないが，肉や内臓，それに魚，牛乳，卵などの動物性たんぱく質を主にして，肝油なども少しはやってよい。

植物性のものでは，米飯，パン，ビスケット，オートミール，うどんなどの穀類が中心になるが，野菜もビタミン類の貴重な補給源である。また栄養のバランスを考えたドッグフーズもよく普及している。

イヌの対人関係

イヌどうしは，姿かたちや大きさなどは違っていても，自分たちだけの方法で，たがいに交渉をもち，情報交換をしている。イヌにことばはないが，それに代わる伝達の手段はいろいろとある。

ほえ合ったり，夜中にする遠ぼえなど，声にさまざまな意味をこめている〔注14〕。態度でも豊かな表現をする。うれしければ尾を振り，相手が弱いとみると昂然と尾をあげ，相手を恐ろしいと感じたときには顔をそむけ，耳をたれ，脚（あし）の間に尾をはさんでいる，といったぐあいにである。

電柱に，雄イヌが片脚をあげて尿をかけている図は，漫画でよく使われる題材だが，実際イヌは，通る道すじに尿をふりまいて歩く。もっとも片脚をあげるのは雄だけで，雌は道の端などに腰を落としてする。しかし，その尿はいくつかの意味をもっている。まず，自分の行動範囲のサインを示すものであり，次いでその尿をしたイヌの年齢，性別，またその強さまでわかってしまう。

背すじをのばし，耳を立てたほうはシェパード
短い脚で大きな耳をたらし
分別くさい顔つきのほうはダックスフント
こんなに違った顔つきや姿をしていても
家犬はみな，同じ1つの種に属している（上）
PH. SERRAILLIER-RAPHO

それから，イヌどうし出会うと，必ず相手の尾の下をかぐが，それは肛門腺（こうもんせん）から，それぞれのイヌ固有のにおいが出ているためである。

《3日飼えば，一生その恩を忘れない》とは，イヌの忠実さについて古くからいわれていることばだが，恩を忘れないということではなくて，飼い主の命令を忠実に守り信頼できるということだろう。人間との出会いからして，イヌは安全と食べ物と宿を飼い主にたよることであり，イヌは飼い主に対して信頼でこたえるといった関係で，その生活感情は家犬の本質的な特徴といえる。《忠犬ハチ公》の例を引くまでもなく，飼い主とイヌとのうるわしい物語はたくさんあるはずである。

また，もう1つの興味ある大きなテーマは，長い旅のすえに，はぐれていた飼い主に出会うといった，イヌの帰家性についてである。伝書バトや渡り鳥も，はじめての土地を飛んで巣に帰るし，すべて住居をもっているほかの動物にも帰家性があるが，とくにイヌは強いようだ。鳥の場合，地形を見ながら目的地に



ポインター型のイヌ
同じように人間に飼われていながら
イヌとネコとは，性格が正反対だという実感を
多くの人がもっていることだろう。しかし
必ずしも両者の仲が悪いとはいえない（右）
PH. J. MARTINERIE-FOTOGRAM







向かうということも考えられるが，イヌにはそういうこともないから，別の能力をもっているか，あるいは嗅覚（きゅうかく）の地図で推理していくのかもしれない。しかし，すべてのイヌが高度な帰家性をもっているとは思えない。この帰家性の原因としていろいろ考えられるうちで，飼い主に対する愛着の強さが，大きな要素ではないかといわれている。

イヌの形態学

家犬くらい，種類によって大きさや姿かたちの異なる動物はいない。体重は500グラムのチワワから，100キロ以上のセントバーナードまであり，体高も16センチから90センチと，それこそいろいろなイヌがいる。

頭と胴と脚（あし）との長さのバランスでみると，細長いからだをしたグレーハウンドに見られる〈長肢（ちょうし）型〉，ブルドッグのようにずんぐりした〈短肢型〉，よく均せいのとれたフォックスハウンドなどの〈中間型〉，それとダックスフントやバセットのような〈極短肢型〉といったぐあいに分けられる。

また，頭部の形も分類的に重要な点で，頭部が狭くて長い〈長頭種〉と，ペキニーズやチンなどのような，頭部が広くて短い〈短頭種〉に分けられる。

吻（ふん）〔鼻の先からストップ——額と鼻のあいだ——まで〕の長さ，頭長〔ストップから後頭骨の突起まで〕，ストップのへこみぐあい，目，耳，鼻，尾の形と色，毛の長短や色彩，これらは各品種の規格として《標準型》が定まっている。

耳のつき方には，立ったもの，たれたもの，半分たれたものがあり，小さいときに断耳してたれているのを立てる種もある。尾も，品種によっては断尾しなくてはならない。

体毛も重要で，長いもの，絹のようなもの，かたいもの，あらいものと，さまざまな規格がある。イヌの国イギリスでは，1945年にすでに113の品種があった。

イヌの成長と寿命についてみると，成長は小型犬のほうが早く，約1年で成犬となり，大型犬では2，3年といわれている。そのうえ，大型犬のほうが短命なのである。イヌの寿命は10年から15年で，なかには20年以上というのもいる。人間に比較してみると，生まれて1，2年での成長が早く，2年ですでに人間の成人に達してしまうといえそうだ。

さまざまな利用法

イヌが，人類の前に飼われるという姿勢で現われて以来，人間はイヌをさまざまな目的のために使ってきた。ヨーロッパなどではむかしは，肉を焼くクシを回させたり，水をくむ水車を回させたりしていた。そのほか，クマや雄ウシと戦わせたり，ネズミをとる競争をさせるといったものもあった。

ドッグレース犬　ドッグレースは，日本やフランスでは行なわれていないが，かなり多くの国でたいへんな人気を集めている。イヌによる競馬といったところである。

イヌを走らせるためには獲物を追わせる。生きたノウサギを原っぱやグラウンドで追わせる草競馬的方法はイギリス，スペインなどで行なわれている。楕円形のトラックに，機械仕掛けで模型のウサギを走らせ，それを追う方法が一般的で，大ぜいの見物人を楽しませる。

ダルマティアンか，それに近い犬種。
ギリシャ，ローマの古い時代から
人間はイヌに曲芸をさせていた。
水の上での訓練は，逃げ場のない
必死の学習場である。（上左）
PH. HOLMES-LEBEL

ホイペット　ドッグレース犬。
一心に機械仕掛けの獲物を追うイヌ。
犬券を手にした人間。ドッグレース場は
興奮のるつぼとなる。レース犬にとってみれば
一獲千金の夢など関係ないことである。（上中）
写真　オリオンプレス

シェパード　軍用犬。
飼い主に絶対服従するという性格から
イヌは，いつの時代にも戦場にかりだされた。
古くはイヌ自身が敵を倒す兵士だったが
今日では，新しい役割を果たしている。（下）
PH. M. ZALEWSKI-RAPHO



盛んになったのはこの50年ほどで，イギリスには150もの公認の競走場がある。アメリカでも馬券ならぬ犬券の売上げはのびている。

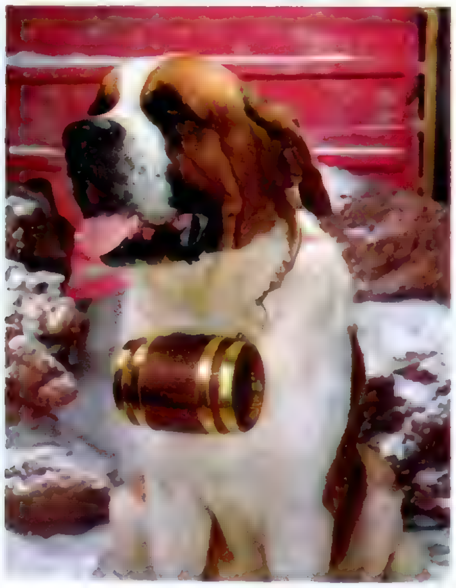
競走用のイヌは，一般にグレーハウンドで，そのスピードは，450メートルを走る場合，時速60キロを越えることもあり，競馬のウマよりも速い。アフリカのアルジェリアでは，スルギーも走らせている。スルギーはグレーハウンドほど速くはないが，耐久力があるので600〜700メートルといった長距離レースもする。英語圏の国では，グレーハウンドとテリアの雑種であるホイペットの競走も行なわれている。その場合，白い布を追わせる。

輓犬（ばんけん）　そり引き犬　イヌは，小型の荷車やそりをひくのにも使われている。かつてヨーロッパ諸国では，牛乳配達，肉屋，パン屋，八百屋などがイヌに荷車を引かせている姿が，あちこちで見られた。それらはマスティフの雑種が多かった。しかし，現在では動物愛護という立場から，ほとんど見られない。日本では北海道の小樽などで，魚を積んだ荷車を引いているのを見ることができる。

交通機関の発達は，イヌが車を引く光景を過去のものにしてしまったが，極地帯では，雪上車などの機械力に伍して，イヌぞりは重要な役割を果たしている。

グリーンランドやアラスカ，カナダではエスキモー犬が，シベリアではサモイドが使われている。北海道では，エスキモー犬の雑種であるカラフト犬にそりを引かせており，南極でその強さが証明された。

8〜10頭からなる1つのチームで，300キロの荷を引いて，1日に60キロの行程を全速力



セントバーナード　救助犬。
スイスとイタリアの国境，セントバーナード峠で
雪中の遭難者救助に尽くした修道僧たちの
敏腕な助手として活躍した。
首の樽には，気つけ薬のブランデー。（左下）
写真　オリオンプレス



シェパード　盲導犬。その訓練はきびしい。
盲人の手足となる盲導犬の条件として
決して目の前のできごとに興奮せず
しかも飼い主を危険から守るための
とっさの判断と行動とが必要だからだ。（上右）
PH. SCAION



雑種犬　車引きイヌ。
小さな荷車なら，ウマを使うこともない。
イヌのスピードとスタミナでじゅうぶんだ。
かつて，ヨーロッパでは盛んに利用されていたが
動物愛護のため，現在ではすたれている。（右下）
PH. NESTGEN-ATLAS PHOTO



で一気に駆けぬける。また12～15頭のチームは、1トンの荷を、並み足で1日15時間も引いていくことができる。

1つのチームは、1頭のリーダーを中心にかたく団結している。雪のない夏の間、飼い主はイヌを放して、自力でえさを捜すように野生生活をさせておくが、そのときでも、このチームはしっかりと1つに結束している。

軍用犬 警察犬 イヌはギリシャ、ローマの時代から軍事目的に使われてきた。マスティフ型のもので、敵を倒す戦闘用であった。現在でも軍隊では、伝令、警備、捜索、看護といった分野で使われている。第二次世界大戦中、イヌに地雷を背負わせて敵の戦車を爆破させる訓練がされていたという。しかし多くは、連絡係として、あるいは危険が迫ると、ほえるかわりに姿勢で合図したり、地雷を探知したり、負傷者を捜すといった仕事につく。

警察犬は、犯人を追ったり、いなくなった人を捜すといった、捜索に協力する。軍用犬にはドーベルマン、シェパード、コリーが、警察犬にはシェパードやボクサーなどが使われている。

盲導犬 1915年にドイツで、世界最初の組織的な盲導犬センターが設けられ、のちに各国に設置された。日本にも、小規模ながら私設のものがある。シェパードが多いが、ラブラドール、コリー、ボクサーなども使われる。性質の穏やかなことが必要で、また命令をよく聞き、自分で判断して行動する能力も求められる。

生後1年くらいのイヌに、約4か月の基本訓練をし、その後約1か月を飼い主の盲人とともにセンターで訓練を受ける。そして約8年間、盲導犬として働ける。盲導犬は雌が多い。雄よりも、この忍耐強い仕事に適しているからである。

学者犬から宇宙犬まで 舞台の上で、計算をしたり、質問に答えて見物人をびっくりさせる学者犬は、別に自分で判断しているわけではない。たんに飼い主の合図に合わせているだけなのである。サーカスで曲芸をするのは、スピッツなどの後肢で立つことの得意なイヌたちである。

イヌが、人間にとっていかに役だっているかをみてきたわけだが、そのほかにもたくさんあるはずである。最後に、1957年、スプートニク2号に乗って宇宙に出たライカ犬の雌がいることを書き留めておこう。

遠い遠いむかし、イヌが人間と出会う以前には
必死になって晩の食事の鳥をつかまえたろう。
しかし、人間に飼われるようになってからは
それは、おおげさなレクリエーションに変わった。
陽気な騒々しさが、耳に聞こえるようだ。
PIL FIRHGLE RAPHO

イヌ・品種の歴史

内田　亨

1つの種の動物のなかで，イヌほど大きさ，形態，毛色などに変化のある動物はない。外形的には，大きさもセントバーナードとチワワとでは数十倍といった差があり，毛色としても種々の色があり，また混色しており，毛の長さも短毛から長毛まであり，ちぢれ毛も直毛もある。耳は立耳とたれ耳，吻（ふん）は長吻と短吻，尾は巻き尾とたれ尾など変化が多いが，歯式は一定しており，交配受胎もたがいに行なわれる。学名は *Canis familiaris* という1つの種に統一されている。

イヌの祖先は，1つの祖先ではなく，多祖的であり，類似した種々の動物の血液もはいっていると思うが，なんといっても人類にもっとも古い家畜として飼われ，長い間，種々の交配を行なってきたことと，その遺伝子の数が多いことのために，現在のように多くの犬種が生じたものと思われる。

イヌは，その形態のみならず，性質も非常に多くの特性をもっているため，狩猟犬，番犬といった天性の仕事のほかに，それぞれの特性をのばした警察犬，軍用犬，捜索犬，伝令犬，盲導犬などの使役犬として，あるいはペット用の愛玩犬として古くから役にたっていた。

展覧会によって犬種が固定

犬種に対する興味は，すでにギリシャ時代からもたれていたが，はっきりと犬種の発達が認められるようになったのは，まずイヌの展覧会（dog show）が行なわれてからである。第1回の展覧会は1859年にイギリスで開かれた。

その後，イギリス ドッグショー協会（The National Dog Show Society）が設立され，毎年，秋にはバーミンガムで展覧会が開かれるようになった。1865年からはパリでも開かれた。

1873年，イギリスにケンネル・クラブ（Kennel Club）が発足し，これが現在の国際畜犬連盟の母体となっている。イギリスでは，このクラブに500以上の団体が連絡をとって，各犬種について独立の会をつくっている。そのほか，ヨーロッパでは国際的な会議を開いて，犬種の規格を決めたり，あるいは研究報告をしたりしている。

公認機関——国際畜犬連盟

現在，世界的に公認されている犬種は100以上に及ぶであろうが，さらにこれらのイヌを交配し，遺伝形質〔ある犬種だけが代々もつ特徴〕を固定させた場合には，新品種を生ずる可能性があるので，さらに犬種はふえていこうが，一方ではすでに絶滅した犬種も多いはずである。一般に新しい犬種はヨーロッパでつくられたものが多く，その他の大陸でつくられたものは少ないようである。

世界的に犬種の規格をつくり，公認していく機関は，ベルギーにある国際畜犬連盟（F.C.I.＝Fédération Cynologique Internationale）で，アジア，南アメリカなどでは，特別な犬種がほぼ固定されていても，ヨーロッパ人に発見され，ヨーロッパに輸入されないと，公認された犬種にならない場合が多い。わが国の日本犬なども，犬種としての資格をそなえていると思うが，まだ公認されていないようだ。秋田犬は1971年現在，公認を申請している。日本犬に類似の中国のチャウチャウはすでに公認されている。秋田犬の公認される日も近いだろう。



ロンドンの展覧会（ドッグショー）風景　写真＝キーストン

血統書

連盟が公認するにあたって，まずその犬種の規格を定めておかなければならない。体高は何センチから，何センチまでの範囲，毛質は長毛かちぢれ毛か直毛か，さらに耳は立耳かたれ耳か，短吻か長吻か，尾の形は，体高と体長のつりあいは，毛色は1色か斑か，あるいは白一色か，褐色か，雑色でもよいか，体重は何キロから何キロまでの範囲，などとその犬種の規格を決めておいて，規格にあてはまらぬものは除外していく。

また公認に際して，新大陸は別として固定した犬種については血統書がなければならない。

血統書は，各犬の協会の登録部が発行するもので，父方と母方の血統が書かれ，その祖先をたどってもその犬種であることが証明されるようになっている。それゆえ，古い犬種ともなると数百代の祖先にまでさかのぼることができるが，新しく犬種の規格を定めたものでは，数十代前にもさかのぼれないものもある。

生まれた子イヌの血統書は，その父イヌの飼い主と，母イヌの飼い主との責任ある証明書によって作成されることになっている。以前には，交尾の写真を添付しないと発効しない時期もあったが，近

——→ ＊

カラーページ注

〔注1〕 **親指**　前肢の親指は，他の指より上方にあるので地面に触れない。後肢の親指は退化していて，指が4本しかないことも多い。しかし，イヌによっては，上方に親指が出ることがあるが，これは一般に狼爪（ろうそう）といって，美観をそこなうので，子イヌのときに除去することになっている。

〔注2〕 **歯式**　イヌの歯数は，上あごが20本，下あごが22本の42本あるのが完全であるが，近親交配などのため，前臼歯に欠歯がでることがよくあり，多い場合には5，6本も不足することがある。門歯，臼歯にもまれに欠歯が出るが，犬歯が欠歯になることはない。ブルドッグのように吻（ふん）の短い犬種でも，ボルゾイのように長い犬種でも歯式は同じであるが，前者の場合は歯が密着し，後者の場合には，歯の間に間隙がある。

〔注3〕 **臼歯の表面**　第4前臼歯と臼歯とは特別な突起をもっているので，肉などを裂くのに適している。しかしネコ科動物の裂肉歯ほどではなく，雑食性であることを示している。

〔注4〕 **皮脂腺**　皮膚腺の一種で，毛髪に付随している場合が多いが，毛髪のない部分にもよく発達している。毛嚢（もうのう）から胞状体となって真皮のなかにはいっていて，脂肪を分泌して毛髪を潤し，皮膚の乾燥を防ぐ役目をする。

〔注5〕 **肛門腺**　2匹のイヌが出会うと，よく肛門をかぐことがある。雄が雌の肛門腺をかぐときは，雌はそのままの姿勢でかがせる。雄どうしの場合，優位の雄は劣位の雄の肛門腺をかぐが，劣位のほうはかぐことを遠慮する。同じくらいの強さの雄どうしだと，同時に肛門腺をかぎ合い，そのまま別れる場合と，けんかになる場合とがある。

〔注6〕 **放浪生活**　野生のイヌは群れをつくって放浪生活をしている場合が多い。放浪といっても一定の行動範囲があり，ほぼきまった道順で放浪する。

〔注7〕 **穴にすむ種**　アフリカの山にいるパリア犬やアメリカのコヨテは，浅い穴の中に1匹ずつはいって，群棲している。

〔注8〕 **群れのなかの階級**　サル類と同じようにボス，中ボス，小ボスなどの階級がある。

〔注9〕 **狩猟本能**　肉食獣はみな狩猟本能を本来的にそなえている。これによって食物を得ることができるわけだが，食物を要求しないときでも，獲物を襲う性質があり，これを狩猟本能という。

〔注10〕 **野生犬**　ここで野生犬というのは，イヌ属 *Canis* 以外のイヌ科に属する真の野生犬で，家畜とするには不適当な種ばかりである。

〔注11〕 **受胎**　大型種と小型種との間では，受胎は可能である。しかし，雌が小型種の場合，母イヌが死ぬことがあり出産できない場合がある。

〔注12〕 **古代の形**　石器時代から，ふつうの中型のもの，マスティフのような大型のもの，グレーハウンドのような肢の長いもの，ダックスフントのように肢の短い形のものなどが知られている。

〔注13〕 **嗅覚**　物質の小粒が空気中に発散し，これが呼吸のときに鼻孔を通って鼻腔内にはいり，そこの嗅覚細胞を刺激し，嗅覚細胞が嗅神経を通じて脳に刺激を与えるものが嗅覚で，イヌの場合は鼻腔が広く，しかもそのなかにひだが多くて接触面が広く細胞も多いので，人類の嗅覚よりずっとすぐれている。

〔注14〕 **声の意味**　人間のようにことばはないが，人間の感動詞に当たる音声に意味をもたせ，喜怒哀楽を表現している。■　（内田　亨）



子ウマの 星子 は，いまだに母親 ポンコ に甘えている

ヒグマと2人のイノシシ 28

やってきた離乳期

畑　正憲

山野でのヒグマの離乳期がいつであるのか僕は知らなかった。

4月，山の根雪がゆるみ始める頃，ヒグマの親子は穴から出てくる。離乳はその瞬間から始まると推測出来よう。しかしたとえばウマでは，子ウマが青草を食べ始めて半年以上もの間，親は乳を与え続けている。

ウマの親と子をさまざまな状態に置いて観察すると，乳房の役割の一端がうかがえて興味深い。現在僕はウマを3頭飼っているが，そのうちの1頭は島で生まれ，僕が取り上げたものだ。

子ウマの名は星子。生後3ヶ月。美味い草と不味い草の見分けもつくし，不断は親からかなり離れた所で餌をあさっている。もう背も結構高くなったし，親の乳を口でまさぐるのは苦しそうだ。

親のほうでもわずらわしいらしく，子ウマがすり寄るとわざと乳首を含み難い体位をとったりしている。そこで僕が近づき親ウマの姿勢を整えてやると，子ウマは得たりとばかりに乳をさぐる。

さて僕はある夕刻，子ウマを隠してみた。すると親ウマは急迫したいななきを続け，つないで置いたロープを切らんばかりに暴れた。

約15分後，子ウマを返してやると親ウマは鼻面で愛撫し，積極的に自分の乳房へと子ウマを誘導した。これは何度繰り返しても同じ情景が見られた。つまり親ウマは，自分の近くに子ウマをひきつけて置く武器――ある意味ではほうびとして乳を使っているのである。

ローレンツが〝すりこみ〟という劇的な法則を発見して以来，僕たちは動物の親と子が認識し合う宿命的な機序にこだわり過ぎてはいないだろうか。僕はこれまでどんべえを入手する日が遅れたことを悔やみ，もっと稚いヒグマを育ててみたいと思い続けている。

けれどローレンツの実験は主に鳥類についてであり，乳で結ばれる哺乳動物についてなら，親の場合はともかく，子の立場はあいまいである。親を認識するという行為は鳥類ほど劇的ではなく，もっとゆとりがあるのではないだろうか。僕はウマを見ながらそう考えた。

そのゆとりが哺乳動物を育てる楽しみの1つであり，食物を与えて手なずけ得ることにもなる。

それにしても，離乳というのは特別な出来事である。乳という完全食品を捨てて自力で餌をとらねばならぬ。そしてそのためには山野を駆け回り，目まぐるしく移り変わる四周からの刺激に対して，持って生まれた本能を調整しなければならぬ。それは子グマにとって決して負担がすくないことではなかろう。この時期に子グマは精神，肉体の両面から鍛え直される。

人間も含めて哺乳動物の成長には2つの大きな山がある。1つは離乳期で，今1つは思春期である。後者は急激なホルモンの分泌によってひきおこされる心身の不安定が大きな特徴であるが，離乳期にも共通した目安はある。島に渡って僕たちの生活に何とか恰好がつき，ホッと一息ついた頃，どんべえにその徴候が現われてきた。

徴候の1つは門歯の勢揃いである。上川で手に入れた頃にいくつか生えてはいたが，まばらで，歯と歯の間にずいぶんと空隙があった。そこへ歯の芽が出たのである。

どんべえの場合，芽と表現するのが最も適当であったろう。縫い針程度の細く鋭い歯が薄桃色の肉を破って顔を出し，またたく間に摩滅し，頑丈な白い歯が伸びてきた。

それを見て僕は嘆いた。

「これはひでえや。でこぼこだらけ，すごい乱杭歯だぞ」

「まったく――」

と，もう1人のイノシシは笑い転げ，

「でもあなたよりましよ。とにかくこれから生え揃うのだから」

たとえ乱杭歯であってもないよりもましだ。しかもそれが生えることが，子グマを苛立たせ，離乳へと導いていく。手



バスタブの中で無邪気に居眠りするどんべえ

* ――――→

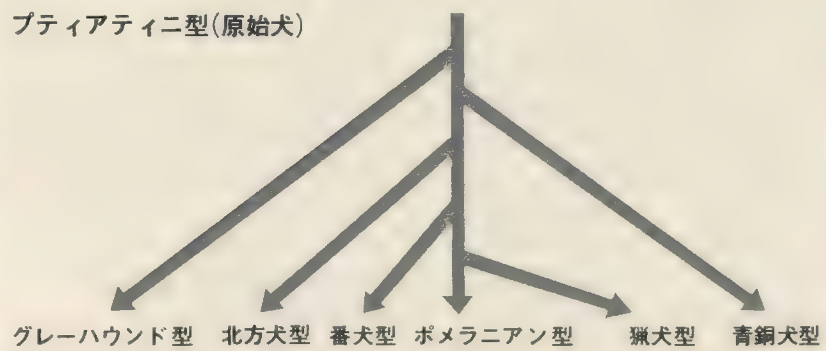
ごろは，イヌの繁殖者の良識にまかされ，不正もほとんどなくなったが，場合によっては，盗んだイヌに同犬種の違った血統書を添付して転売するような不徳漢もいる。

わが国には10数余りのイヌの協会があり，みな血統書を発行しているので，ときによって，同一犬に2種の血統書がつくこともあるが，その祖先をたどれば同一犬であることが証明される。

血統書には血統案内というものがついており，そのイヌの祖先の傾向，たとえば，嗅覚がすぐれているとか，大胆であるとか，色素の濃い遺伝子があるとか，あるいは，音にシャイ〔臆病〕であるとか，白色犬を生むとか，欠歯を出す遺伝子があるなど，よいことも悪いこともわかるようになっている。

イヌの分化の系統

現在知られているイヌは，次の7亜種に分けられる。(1)プティアティニ型 *Canis familiaris putiatini*（原始犬と野生のパリア犬，ディンゴが属する）。(2)ポメラニアン型 *Canis familiaris palustris*（テリアの類，ピンシェル，シュナウツァ，スピッツ，チャウチャウ，日本犬など）。(3)北方犬型 *C.f.inostranzeni*（エスキモー犬，ライカ犬，サモイドなど）。(4)番犬型 *C.f.decumanus*（マスティフ，ブルドッグ，ニューファウンドランド，セントバーナードなど）。(5)青銅犬型 *C.f.matris-optimae*（シェパード，コリーなど）。(6)猟犬型 *C.f.intermedius*（ポインター，セッター，スパニエルなど）。(7)グレーハウンド型 *C.f.grajis*（グレーハウンド，サルキー，ボクサー，アフガンなど）。



これらのイヌは，野生犬をのぞいて，みな相当に分化している。しかし，もっとも原始型を温存しているのは家犬のポメラニアン型の一部で，これは原始からの直系であると思われる。7亜種の類縁系統関係を現存種に向かって図にしてみると左図のようになる。枝は分化していく時間的経過である。この図のなかでも雑種がつくられており，たとえばグレートデンは，番犬型とグレーハウンド型との交雑によってできた犬種である。■

当たり次第ものを咬むのは，歯の新生によるむずがゆさにも由来している。

食物の好き嫌いにも安定さを欠いてきた。ミルクをむさぼり吸うかと思えば，次の食事では他のものを要求した。

僕たちがロクなものを食べていないという噂が対岸の漁村に伝わり，島の前を通る船から生きたタラバガニやケガニが放りこまれるようになった。それを早速ゆでて与えると，どんべえは僕の足をしっかり抱えて，タラバをほとんど1匹ペロリと平らげたりした。丸い目をますます丸くして。

だが家族はぼやいた。

「変な気分だなあ，こちらはコマイの干物とコンブばっかり食べているのに」

「そうよ。ちよっとどころか，大々的に過保護よ」

「そうだよなあ」

僕は家族に黙って頭を下げていた。

そもそもこの島へ連れてくる時，ケガニやタラバ，サケやマスを生きたままたらふく食べさせるというのがキャッチフレーズだった。けれども僕には思うところがあり，初物はすべてどんべえの胃袋へと消えていった。

それどころか，家族の食事の時間が目茶苦茶になってしまった。どんべえは好奇心が強いので，同じ食卓で食べるなんてとんでもない話だった。

「ドンはまだ寝ないの？」

「もうちょっとだ」

「早くしてよ，お腹空いたから」

「よしきた。そうれ，どんべえ，おまえはネムークなる，ほうれ，ネムークなってきたァ」

僕は奥の手である催眠術を使ったが，そういう時に限ってどんべえは目をパチクリ開けていた。娘と妻は押入れの上段で難を避け，僕と弟はどんべえの耳元で子守歌を歌ったりした。

ねんねんよう　おころりよう
ドンはいい子だ　ねんねしな
ケネボクと世界平和のために

歌詞はデタラメだが，僕たちは音痴だから口から出まかせ歌えば，これみな子守歌になるのである。

——やっと眠ってくれた。

——やれやれ，用意するわよ。

——頼む，空腹で死にそうだ。

2人のイノシシは目で会話をかわし，そっと食卓を出し貧しいおかずを並べる。そして一口か二口食べた時，必ずと言っていいほどどんべえが目を覚ますのである。それからが大変だ。

第一次の防波堤がこの僕。

「さあこい，どんべ」

そう言って，食卓を背にして自分の茶碗からご飯を与え，おかずを与える。

「さあ，急いで」

「ひゃあ，しゃっくり」

そのすきに，気違いじみたスピードでつめこむのだが，そう長くは続かない。どんべえは僕に武者ぶりついて，脇の下をくぐり抜け，ついには食卓に到着し，ありとあらゆるものをひっくり返し，なめ，はじきとばし，最後には食卓の上に坐りこんでキョトンとしている。

そのようすがおかしくて，僕たちはゲラゲラ笑った。全員爆笑し，腹の皮がよじれ，涙さえ浮かべる始末だった。

だが，いよいよ難しい時期がやってきた。僕のメモに「好物」として書かれているものをすべて受けつけなくなってしまったのである。僕はそれを離乳期のせいだと判断した。■



いたずら好きのどんべえは，何でもひっくりかえし，においをかいでみる

動物渡来記　3

百済から来たみつぎ物のラクダ

上野益三

日本国内にいる大型の野生動物は，シカ，イノシシ，クマぐらいのものであるから，それらよりはるかに大きいラクダの渡来は，各地でもてはやされた。その姿かたちはゾウほどではないにしても，魁偉ということばがぴったりの奇妙なようすのけものであるから，物見高い世人が見のがすはずがなかった。

ラクダには，背上にある「瘤峯」が1つだけのアラビアラクダ（ヒトコブラクダ）と，2つのバクトリアラクダ（フタコブラクダ）とがある。前者はアフリカとアジアの西南部に，後者は中央アジア，とくにアフガニスタンとトルキスタンの間，ゴビ砂漠，モンゴルなどの地方にいる。いずれもすべて家畜化している。フタコブラクダには野生種もいるといわれているが，じゅうぶん研究されてはいない。ラクダは古来，アジアとヨーロッパとを連絡した，いわゆるシルクロードの主役で，隊商たちはラクダなしでは砂漠の大旅行はまったくできなかった。それゆえ，ラクダの東西文化の交流に果たした役割もきわめて大きく，日本文化もその恩恵を受けたわけである。

ラクダは中国本土から朝鮮半島へも引かれてきたらしく，「日本書紀」推古7（599）年9月の条に，百済の国（朝鮮半島南部）からわが朝廷へのみつぎ物のなかに，他の動物2,3とともに，「駱駝一疋」があったことを記している。苦労して引いて渡ったものと思われるが，乾燥気候地方の生活に適応したラクダが，日本のような湿潤な国で生きながらえたとは考えられない。そののちも，わが古代にラクダがみつぎ物として持ち渡られたことが何回かあるが，その運命はまったくわからない。それらは，いずれもおそらくフタコブラクダであっただろう。

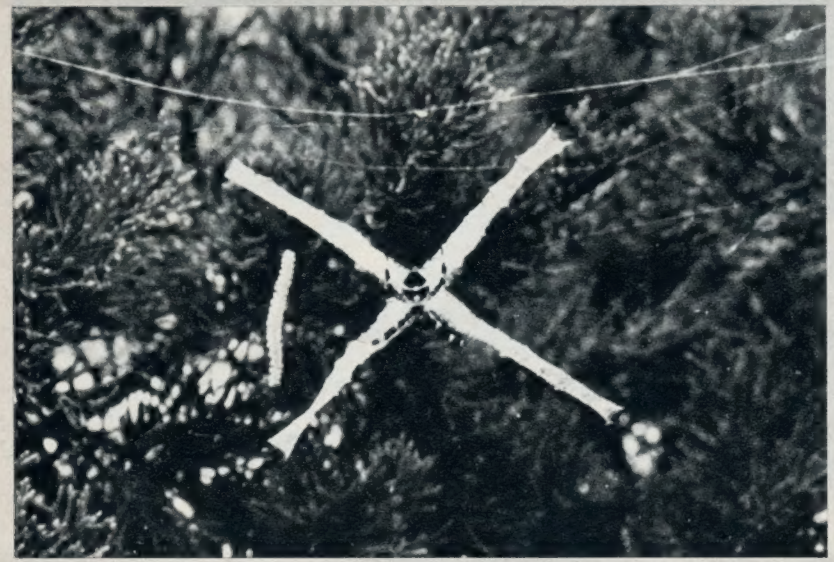
江戸時代になると，渡来したフタコブラクダとヒトコブラクダとの区別が，はっきり記録されている。「瘤峯」はもっとも目につきやすい特徴だからである。享和3（1803）年7月に，オランダ船が積んできた1頭は，フタコブラクダであったが，陸揚げせずに連れてかえった。長崎奉行が持ちこみを許さなかったのである。それから18年のちの文政4（1821）年の6月下旬に，同じくオランダ貿易船で長崎にきたのが，雄，雌2頭のヒトコブラクダであった。この2頭は，翌5年に大阪に引かれてきて，難波新地で見せ物になり，大阪じゅうの人気をさらった。松川半山という画家がそれを写生したものが，同じく大阪の暁晴翁（はじめ暁鐘成）が著わした「雲錦随筆」という本に載せてある。ヒトコブラクダの目つきはむしろ柔和なほうなのに，この半山の絵では少し鋭すぎるし，人物にくらべてラクダの大きさを少し誇張している。晴翁の文に，その産地を亜辣比亜国としてあるのは正しく，そして，「実に往昔より未だ渡らざる珍獣也」と書いている。また，「真の駝は背上に肉峯両隆起て」と，フタコブラクダのことにも触れているから，ヒトコブラクダは日本ではまったく「珍獣」であったのであろう。大阪にきたヒトコブラクダの2頭は，そののち元気で，各地を巡業して江戸へもいった。ところが，動物の原産地や習性に無知な興業師が，北国へも連れていって死なせてしまったらしいが，その末路の詳しいことはわからない。

なお，「増訂武江年表」という本の文久3（1863）年の項に，「両国橋西詰にて駱駝を見せものとす，天保に渡りしよりちいさし」とあるから，天保年中にも渡来したことがあったらしい。■

（動物学者）

暁晴翁の「雲錦随筆」に出ているヒトコブラクダの図（松川半山画）





読者のアルバム　5

珍しいクモの巣　　写真と文　呉　青洋

外出しようとして玄関を出るとき，ふと前方の木に白い十字形のものがあるのに気がついた。なにかの花かと思い，近づいてみてびっくりした。それはなんとクモの巣だったのである。

きれいな十字形で，しかも和紙でつくったようなふわりとしたまっ白い巣の中に，身長わずかに1センチほどの小さなクモが，頭を下にして獲物を待ちかまえていた。黒・銀・黄・オレンジの4色にいろどられたかわいいこのクモが，どういう種類で，またどのような習性をもっているのかはわからないが，小さな生命が，自分自身の力で，こんなに美しい巣をつくるのかと感服せざるをえなかった。

珍しいものを，自分ひとりだけで楽しむのはもったいないと思い，さっそく家の者にも知らせたところ，「変なクモだなあ。世のなかが狂ったのかな」などといいながら，みんなびっくりしてながめていた。■　　（神戸市・29歳・学生）

仲間のひろば

すみついたのらネコ

物置きでのらネコが子を生んだのは5年ばかり前のことです。はじめは気にもとめなかったのですが，激しい雨のなかを，子ネコの乳の分まで自分でえさを捜しにいく姿があわれになり，有り合わせのえさと水を持っていったのがつきあいのはじまりです。

ネコはわたしを見れば逃げるので，えさと水を置いて，大急ぎで姿を消すような月日が続きました。そのうち，ニャーンというごあいそうが聞けるようになりました。わたしの経験では，のらネコはおこったときに鳴くだけで，ニャーンは人間への信頼と愛情のあいさつであると理解しています。

最初のころは，成長した子ネコは1年ぐらいでどこかへ姿を消し，残った親ネコがあわれで，えさの取り合わせにも心を注ぎました。こうして何代かたつうちに，いろいろなことに気づくようになったのです。

鼻が黒かったり，額のまん中から分かれた黒い毛が両方のひとみをおおってほおの下部へと流れ，ちょうどパーティーのマスクをかぶったような面相の悪いのが代々生まれるのです。親の無器量におのれの悪さを重ねた顔だちで，俗に「よいところは似ない」といわれるとおりです。わたしたちも，子孫によいものを残せる人間になりたいと，語りあったものです。

まれに，飼いたくなるほどの美貌も生まれますが，すぐにいなくなってしまいます。親のそばでないと育たない時分に，どこへいってしまうのでしょうか。顔だちのいかんにかかわらず，育つのは，生まれた数の半分から3分の1です。生きつづけるのに運とともにたくましさが必要なのは，人間ばかりではないようです。

気ままなのらネコがわが家にすみついたのは，よくよくの縁でしょう。現在は親子，姉妹など5匹が，飼いネコの保護とのらネコの自由をあわせもって，庭に干した寝具の上でひなたぼっこをしています。マーケットでは，最初に鰹節を買うわたし。彼女たちは，わたしの人生の指針になっているとは思ってもみないでしょう。■

（京都市・武田節子・37歳・会社員）



担当
杉浦　宏
（上野動物園水族館飼育係長）

〈問〉　子どもがオタマジャクシを買ってきましたが，いつまでたってもカエルになりません。どうしたのかと家じゅうで心配しています。えさが悪いのでしょうか。

（伊勢原市・大平正子・28歳・主婦）

〈答〉　同じような内容の質問がたくさんありました。たしかに今ごろの季節になると，春に見かけた小さなオタマジャクシの姿はなく，小さなカエルが川岸やたんぼでピョンピョンはねています。ふつうのカエルは春から初夏にかけて卵を生み，卵からかえったオタマジャクシは，その年のうちに手足がはえそろい，カエルに変態します。ところがオタマジャクシのままの姿で冬を過ごし，翌年変態してカエルになるという種類もあるのです。それは，一般に食用ガエルといわれているウシガエルです。もともと日本にいた種類ではなく，今から50年ほど前に原産地であるアメリカから輸入され，今では日本の各地にひろがっています。もっとも，暖かい地方では，ウシガエルもふつうのカエルと同じように，その年のうちに変態することもありますが，ほとんどはオタマジャクシのまま越冬するので，心配はいりません。じゅうぶんにえさを与えて育ててください。■

〈問〉　オタマジャクシのうちは，菜っ葉や煮干しをやって育てることができましたが，手足がそろって，やがて小さなカエルになりました。えさに困ってしまい，結局，庭に放してしまいました。小さなカエルを育てる方法があったら教えてください。

（津山市・水原道夫・14歳・中学生）

〈答〉　確かにオタマジャクシのときは，きちんとえさを与え，水をきれいにしておいてやれば，子どもたちでもじゅうぶん飼うことができます。カエルに変態してしまうと，いままでのようなえさでは育てることができません。カエルは虫など動いているものをすばやく捕えて食べます。そこで容器も換えなくては，カエルが逃げていってしまいます。カエルだけでなく，えさにする生きた昆虫（こんちゅう）が外に逃げてしまっては，なんにもなりません。ここに1つの例をあげますが，皆さんも考えて，飼いやすいカエルの容器をつくってください。

生け花に使う大きな水盤にサランの防虫網を使って，テントのようなふたをつくります。水盤の中には水のほかに，カエルがはいあがれるような石を置きます。えさの昆虫を入れる口をつくり，ハエやカなどを捕えてその中に入れてやると，カエルは喜んで食べるでしょう。また水槽に防虫網でふたをつくり，カエルや昆虫が逃げださないようにしてもよいでしょう。

えさは生きている昆虫をもっとも好みます。カエルが小さいうちはボウフラを水のなかに入れておくと，やがてカになって飛びだします。ある小学校の子どもたちが育てているカエルを見にいったとき，牛乳ビンの中にバナナを一切れ入れて，ショウジョウバエがビンの中にたくさんはいるのを待って，手でふたをしてカエルの水槽に入れてやっていました。変態したばかりの小さなカエルには，ショウジョウバエはちょうどよい大きさでした。また，バラの幹に集まるアリマキや，葉の裏に生みつけた昆虫の卵を葉ごとカエルのケージの中へ入れておくと，孵化してきた幼虫を食べるでしょう。近ごろミールワームが市販されるようになりましたが，この虫もよいえさとなります。

生きた昆虫のほかに，肉を小さく切ったものを竹ひごの先にのせ，カエルの前で静かに動かしてやると，食べることがあります。根気よくならすと，目の前にえさの魚肉や肝臓を小さく切って置いてやるだけで，食べるようになります。わたし自身もむきエビをえさにして，オーストラリア産のアマガエルを1年以上飼育した経験があります。■

裏表紙説明

シベリアのそり引き犬　雪をけたたて疾走するライカ型のイヌ。スプートニク2号によって宇宙に打ちあげられ，ライカ犬の名を世界じゅうに記憶させたが，それまでは，ソ連以外ではあまり知られていなかった。

ライカというのはロシア語で《ほえるもの》という意味で，特定の犬種というより，地域差のあるいくつかの犬種の総称だといわれている。

典型的なスピッツ型犬で，イギリスではシベリアンスピッツとも，ルシアンスピッツとも呼ばれている。用途的には，現在では番犬に分類されるが，そり引き犬として極地探検などにも使われ，狩猟犬としてはクマ，シカ狩りなどに使われていた。冷静で，耐久力があり，いかなる困難をも越えようとする意志が，その顔からもうかがえる。■

Ph. Collard-Atlas Photo

▶ **おことわり**　本号「もうひとつの世界」は休載します。

狗俑

これは中国の後漢時代，すなわち紀元1世紀から3世紀初め頃の間に作られた，やきものの犬である。むく犬かと思われる精悍な犬がうずくまり，頭をおこし耳を立て，大きな口を開いて吠えている。鋭い牙をむきだし，らんらんと目を光らせた猛犬の生態がいきいきと表現されて，やきものではあるが，前に立つとあと退りしたくなるような迫力がある。カラーでないのが残念だが，全身赤褐色の釉薬の発色がまたみごとだ。

中国の彫塑の特質のひとつは，木でも金属でも塑でも，形が強くしっかりしている点で，漢代はとくにその特質が明確である。石の彫刻をはじめ，青銅の像，やきものの像が非常に発達し，人物，動物の大小の彫塑が無数に作られたが，後漢になるとすべてに写実的な表現が進んでくる。しかし，写実的といっても，ただ対象をリアルに模すのではなく，内面的に充実した生気を簡潔な姿にこめるのである。この犬も，大きな頭に比べて体を少し小さくあらわすことにより，精悍な内面的性質を，真に迫るものに感じさせている。ほかにも，同じ頃のやきものの犬がかなり残り，いずれも優劣をつけにくい出来ばえを示す。

このような動物や人物の彫塑は，墓に副葬するために作られたと考えられる。愛玩用や鑑賞用の玩具ではなかったことも，この形のきびしさを生み出した大きな要因だったのであろう。■

（水尾比呂志）



後漢　褐釉陶　高さ31.4センチ

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻30号　昭和46年10月3日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



シベリアのそり引きイヌ　　説明 30ページ

雑誌　0631—10／3